

荒神山

発掘調査報告書

1987

山梨市教育委員会

序

荒神山窯跡の発掘調査は、山梨市教育委員会の直営のもと、昭和61年11月1日から17日かけて行われました。この間、発掘調査主任を萩原三雄氏（財団法人山梨文化財研究所）に依頼し、地元の皆様のご協力をいただきました。

調査の結果、窯址三基が発見され、全国的にも極めて類例の少ない、平安末期の窯跡であることがほぼ判明しました。この窯では、碗・皿等の什器類を中心に焼かれており、窯の生産品には変化が見られ、これまで不明な点が多くいた土師器・土師質土器の学問的研究、特にその編年を知るために多大な成果があると考えられます。

なお、立地形態も本窯跡の場合、集落の近い場所を選ばず、山の中腹に窯を構え生産活動を展開していることは、従来考えられていた集落と生産の場との位置関係を覆すものであり、本窯跡の事例は従来のわが国窯業史研究に、大きな波紋を投げかけたといえます。

荒神山及びその周辺には、まだ多くの窯跡・住居跡等も存在する可能性があるので、時期をみて今後調査を実施したいと考えております。

最後に、文化庁・県教育委員会のご指導と地元及び発掘調査関係者皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

昭和62年3月31日

山梨市教育委員会

教育長 佐藤精一

例　　言

1. 本書は、山梨県山梨市東576番地に所在する荒神山墓跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国および県から補助金を得て、山梨市教育委員会が調査主体となり実施し、山梨県教育委員会及び駒山文化財研究所の指導を得た。
3. 発掘調査は、昭和61年11月1日から同年11月17日まで行い、発掘総面積は約60m²である。
4. 本書の執筆は、第Ⅰ章を萩原、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章(a)・第Ⅴ章(a)を平野、第Ⅳ章(b)・第Ⅴ章(b)を畠が担当し、編集は萩原の指導の下に平野が行った。
5. 本調査における諸記録・出土品は、山梨市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査及び報告書作成にあたり次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜わった。記して感謝する次第である。(順不同、敬称略)

服部敏史、福田健司、谷口一大、県文化課(新津健)、県埋蔵文化財センター(田代孝、坂本美夫、末木健)、駒山文化財研究所、山梨県考古学協会、甲斐歴史会、山梨市文化財審議会委員(植松又次、河野英雄、手塚寿男、荻原定徳、古尾善博、雨宮博文、手塚巖、堀内和夫、荻原桂、矢ヶ井圭男)、岩手公民館(樋口公夫、佐藤裕彦)、発掘調査土地所有関係者(樋口治男、野沢恭政、橋爪保直)

目　　次

序　文	
例　言	
第Ⅰ章　発掘調査の経緯	1
第Ⅱ章　遺跡の概観	1
第Ⅲ章　発掘調査の経過	3
第Ⅳ章　遺構と遺物	4
(a) 遺　構	4
(b) 遺　物	6
第Ⅴ章　まとめ	9
(a) 遺　構	9
(b) 遺　物	10

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

荒神山窓跡は、本市域の遺跡調査にたずさわってきた研究者らにより古くから知られてきた遺跡である。それは特に、本県の考古学調査の嚆矢である日下部遺跡とのかかわりにおいて注目を受け、特異な立地条件などから遺跡の実態や性格について強い関心が払われていた。また、1970年代後半の分布調査時でも改めて現地踏査され、遺跡の重要性が再認識されている。

1985年には再び、古代の山梨を知る会の会員らによって分布調査が行われ、これを契機に広くその存在が知られることになり、同時に遺跡の詳細な調査と保存措置が叫ばれるようになつた。また地元有識者の間でも遺跡の保存と性格の解明を望む声が高まつていった。

荒神山窓跡は、現在果樹園中に存在するため、耕作等の影響をじかに被り、年々消滅の一途をたどりつつある。この現状を憂慮した地元教育委員会は、これらの要望に応え、遺跡の規模、形態、性格等の追究を目的にした緊急調査を計画、県教育委員会の指導を受けつつ調査体制を整え、1986年11月1日から調査に着手することになった。

第Ⅱ章 遺跡の概観

山梨市は、甲府盆地の北東部にあたり、市の中心には奥秩父連峰南麓に源を発する笛吹川が南北に貫流し、西部の足川、弟川、南部の重川、日川とともに広大な氾濫原・扇状地を形成している。荒神山窓跡は、山梨市の中央部、笛吹川右岸にある荒神山（標高477m）の東端緩斜面



第1図 遺跡位置図(1/25,000)

上に立地しており、行政区画では、山梨県山梨市東576番地に属している。現在荒神山一帯は、ぶどう、桃等の果樹園として利用されている。

笛吹川流域には、数多くの遺跡群が存在するが、『和名抄』による古代甲斐国の山梨・八代・巨摩・都留の四郡のうち、山梨郡は現在の山梨市域等が比定されており。古くより本周辺地域には八代郡等の郡・郷が設置され、そのために開拓や人口の集中が進み、甲斐国内においても先進の穀倉地帯であったといえよう。山梨市内においても縄文時代から古代・中世・近世にわたる多くの遺跡群が存在しており、中でも荒神山窓跡の対岸には、本県における平安期の集落址調査の先駆けである日下部遺跡が存在している。堅穴住居址約30軒と掘立柱建物址が発見され、出土遺物も土師器、須恵器、灰釉陶器、鎧帶金具等多数出土している。

奈良の正倉院に所蔵されている調庸綾絨布に記された墨書に、「甲斐国山梨郡可美里日下部□□□□□四和銅七年十月」とあり、日下部周辺は文献史学者、考古学者の注目を浴びている。これは、発掘調査された日下部遺跡の年代より若干遡るものであるが、まだ周辺に該期に属する集落址等の遺跡が存在することは間違いない、今後の発掘調査が期待されるものである。ま

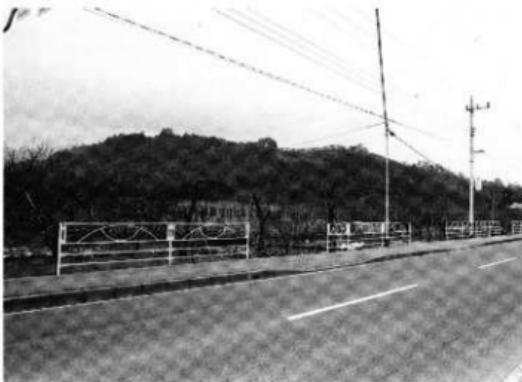
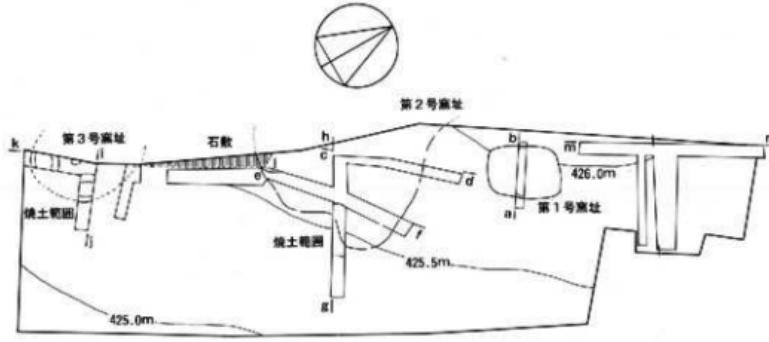


写真1 遺跡遠景



第2図 遺跡全体図 (1/120)

た、日下部遺跡の近くに存在する七日子遺跡からは平安期と思われる竪穴住居址と布目瓦等が発見されており、本地域は平安期集落址の大包蔵地帯といえよう。
^(註2)

その中で荒神山窯跡は、遺跡分布調査実施の際より、本県にあまり類例のない土師器生産遺跡として古くから注目されていた遺跡であった。本県においての土師器生産遺跡は、北巨摩郡須玉町の大小久保遺跡、小淵沢町の前田遺跡等しかなく、それらはおおむね9世紀～10世紀代^(註3)の土師窯である。構造的にも簡単な平窯の形態をとるものである。近年、様々な開発に伴って行われる発掘調査で発見され注目を浴びてきた平安期の集落を支えてきた土師器生産遺跡の実態は、ほとんど未解明の状態におかれ、古代甲斐国における工人集団のあり方は重要な研究課題とされてきた。荒神山窯跡周辺にも先述のとおり、日下部遺跡や七日子遺跡が存在することから、本窯跡との有機的な関係が十分に考えられる。

(註1) 1945～57年にかけて第4次調査まで行い、現在、本調査報告書の作成中で日々刊行の予定である。

(註2)『山梨県地名大辞典』角川書店 1984 参照

(註3) 山路恭之助『大小久保遺跡』須玉町教育委員会 1983

(註4) 佐野勝広『前田遺跡』小淵沢町教育委員会 1985

第III章 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和61年11月1日より開始し同年11月17日まで行った。調査区において窯址の可能性のある部分に2m×2mのトレンチを4箇所設定し、ジョレン等で掘下げを行い、遺構の検出状況により拡張を行った。最終的には調査区域のほぼ全域をカバーした。

調査の結果、窯址と思われる遺構3～4基、土坑状の落ち込み2箇所を確認した。調査区域が狭いために遺構の大半は調査区域外に存在し、しかも現況がぶどう畑のためと、永年の耕作等のために遺構はかなりの削平をうけており、焼土塊や土器片が露出しているという状態だっ



写真2 作業風景

た。表土も極めて薄い堆積状態で、雨が降るとぬかるみ状態となり、晴天が続くと乾燥し固まってしまうという状態の中、慎重に調査を進めたが各遺構の全容を明らかにするまでには至らなかった。遺物に関しては平安時代末期の土師器及び土師質土器が調査区全域で出土をみたが、特に第2号

窯址からの出土の割合が多かった。

今回の調査では、窯址自体の構造等も明らかにすることができますが、終わってしまった感があるが、今回の調査で得られた最大限の調査成果から、荒神山窯跡のかかえる諸問題を考えていきたい。

第IV章 遺構と遺物



写真3 第1号窯址

(a) 遺構

遺構は、先述のとおり窯址と思われる遺構3~4基、土坑状の落ち込み2箇所を確認した。窯址は、耕作等のためかなりの削平をうけており、焼土塊及び土師器片等が露出している状態で、本調査区においての遺存状態は良好とはいえない。

第1号窯址（第2・3図、写真3）

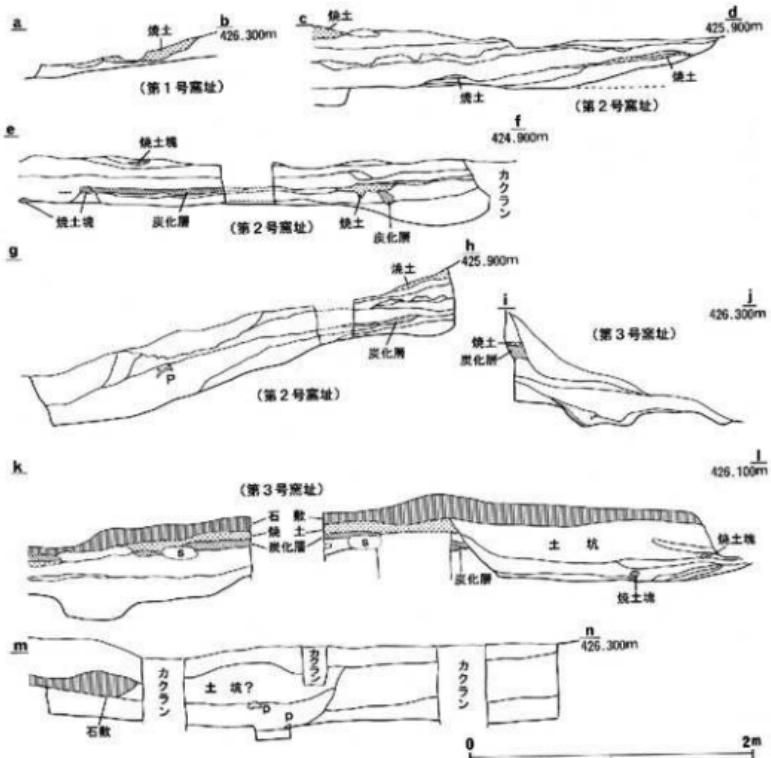
本窯址は、調査区北東部に位置しており、焼土の括りをもって窯址としたものである。本窯址もかなりの削平をうけており、掘り込みをわずかに残すのみである。平面形態は、隅丸長方形を呈し、長径1.4m、短径0.9mを測る。出土遺物はほとんど無く、図上復元にも耐えない土師器片を数片出土したのみである。焼土の堆積は、確認面より約10cm程度みられ、構造的には平窯の構造をもつものと思われる。

第2号窯址（第2・3図、写真4・5・6）

本窯址は、調査区のほぼ中央部に位置しており、焼土の括りとともに多量の土師器、土師質土器が出土している。本窯址の中心とその大半は、調査区西側の調査区域外にあり、その規模等は不明である。焼土は



写真4 第2号窯址



第3図 サブトレーンチ土層図 (1/40)

表土を除去するとすぐに露出し、かなり広範囲にわたっている。

当初、遺物の遺存状態、出土状態等からみて灰原ではないかと考え、サブトレーンチを3箇所設定し調査を進めた。

その結果、焼土層は約5~10cmの堆積で、その下層には炭化粒等を含んだ暗黄褐色土を基本とする間層がみられる。さらに確認面より約30cm下に、焼土をやや多く含んだ赤褐色土が散在して看取され、そしてほぼ同一レベルにおいて炭化粒を多量に含んだ暗黄褐色土が看取される。このセクションをみると限り、窯の壁を思わせるような立ち上がりも見出せない。よって窯の構造を積極的に想定することは現段階ではできない。

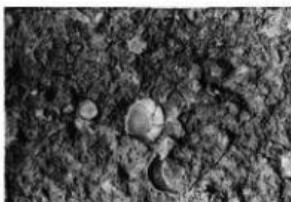


写真5 第2号窯址遺物出土状況



写真6 同 上



写真7 第3号窯址



写真8 同 上

遺物は、サブトレンチ内からも出土しているがその量は少ない。圧倒的に確認面のレベル付近からの出土が多い、土師器、土師質土器をはじめとして、用途不明の鉄製品も1点出土している。さらに卵大から拳大にかけての焼土塊が比較的多く出土している。

第3号窯址（第2・3図、写真7・8）

本窯址は、調査区南端に位置している。本窯址も第2号窯址同様、その大半が調査区域外にあり、土手にかかるセクションにおいて確認されたものである。

焼土層は他の窯址と同様に、表土を除去するとすぐ露出し、その下層には炭化層がみられ、いずれもフラットで約1.8mの幅をもっている。人頭大の礫が炭化層中に

2個みられるが、その性格及び本窯址に伴うものかどうかは不明である。焼土層上には拳大の礫を中心とした石敷きの面が厚さ5~20cmでほぼフラットに調査区全域にみられる。この存在時期は不明だが、何らかの造構になると思われる。また、本窯址はその北側を土坑状の暗褐色土の落ち込みによって切られている。本窯址もセクションを見る限り窯の壁と思われる立ち上がり等を確認することはできなかった。

遺物は、炭化層中及びその下層の暗褐色土中より、土師器の壺・皿が数点出土しているのみで、その量は少ない。

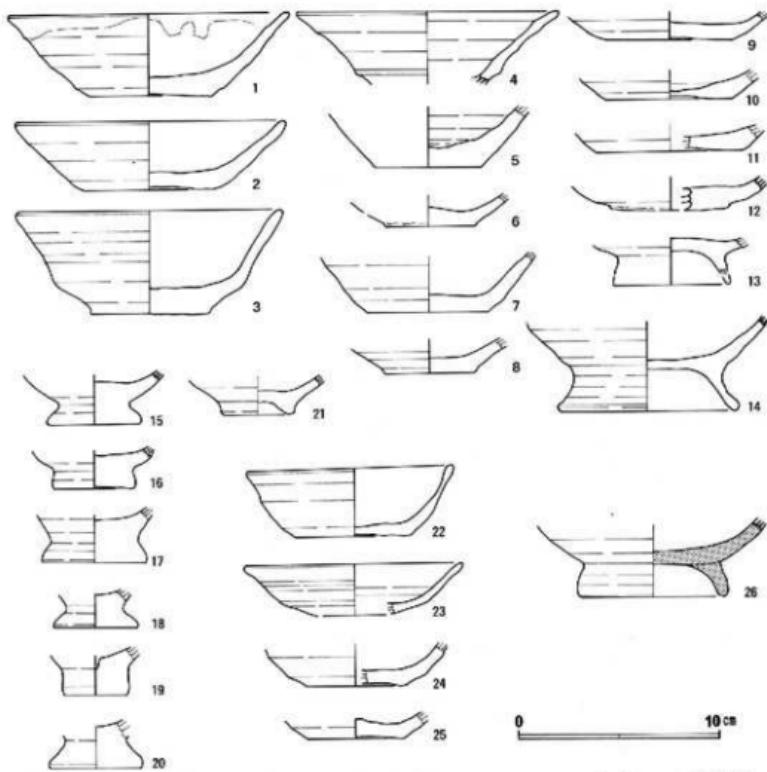
（b）遺 物

出土遺物としては、土師器・土師質土器・灰陶陶器・模状の鉄製品が検出されているが、量的には土師・土師質の什器がその大部分を占めている。出土地点については、第2号窯址及び第3号窯址に集中しているため、その両所の遺物を中心に土器・灰陶陶器・鉄製品にわけ、土器・灰陶陶器については器形が比較的つかめるものについて個々の例に触れてみたい。

土器の整形について特筆していないものについては、ロクロによる横ナデ整形のみである。また底部については磨滅しているものが多く、明確に判別できるものののみを記した。

土器（第4図、1~21 第2号窯址出土、22~25 第3号窯址出土）

1. 口径(推定)14.0cm、器高4.1cm、底径6.2cmを測る。胎土は緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で黄褐色を呈する。内外面とも口縁部にタール付着。2. 口径(推定)13.5cm、器高3.5cm、底径7.0cmを測る。胎土はやや粗めで白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で赤褐色を呈する。内外面とも一部黒変部あり。3. 口径(推定)13.3cm、器高5.1cm、底径6.0cmを測る。底部は回転糸切り痕。二次的な炎を受けていたためか、内外面断面ともに黒褐色を呈し、白色小砂粒・石英を含む。4. 口径(推定)は13.2cmを測る。胎土はやや緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成は良好で暗褐色を呈する。5. 底径は5.2cmを測る。胎土はやや緻密で



第4図 窯址出土遺物（第2号窯址1~21、第3号窯址22~25、26はm-nサブトレンチ内出土）

赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で赤褐色を呈する。6. 底径は4.6cmを測る。胎土はやや緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成は良好で褐色を呈する。7. 底径は5.9cmを測り、底部は回転糸切り痕を残す。胎土は緻密で赤色粒・石英を含む。焼成は良好で内面は黒褐色、外面は明褐色を呈する。8. 底径は4.4cmを測る。胎土はやや緻密で、赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で赤褐色を呈する。9. 底径(推定)は6.0cmを測る。胎土はやや緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で褐色を呈する。10. 底径(推定)は6.1cmを測る。胎土は緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で赤褐色を呈し内外面とも黒変部をもつ。11. 底径(推定)は7.2cmを測る。胎土は緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成は良好で内面は黒褐色、外面は褐色を呈する。12. 底径は6.0cmを測る。胎土は非常に緻密で赤色粒・石英を含む。焼成も良好で暗褐色を呈する。13. 胎土は非常に緻密で赤色粒・石英を含む。焼成も良好で明褐色を呈する。14. 高台径は9.0cmを測る。胎土は緻密で赤色粒・白色

粒・石英を含む。焼成も良好で明褐色を呈する。15. 底径は4.2cmを測る。胎土は非常に緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成も良好で淡褐色を呈する。16. 底径は4.0cmを測る。胎土は緻密で白色粒を含む。焼成も良好で赤褐色を呈する。17. 底径は5.6cmを測る。胎土はやや緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成もやや良好で明褐色を呈する。18. 底径は4.4cmを測る。胎土は緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成もやや良好で赤褐色を呈する。19. 底径は3.2cmを測る。胎土はやや緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成はやや良好で暗褐色を呈する。

20. 底径は4.6cmを測る。胎土、焼成は19と同じ。21. 高台径は3.2cmを測る。二次的な炎を受けたためであろうか、内外面断面ともに黒褐色を呈する。胎土はやや緻密で白色粒を含む。22. 口径10.4cm、器高3.4cm、底径5.7cmを測る。胎土はやや緻密で白色粒・小砂粒を含む。焼成もやや良好で内面暗褐色、外面赤褐色を呈する。23. 口径(推定)は11.0cmを測る。胎土は非常に緻密で赤色粒・石英を含む。焼成も良好で明褐色を呈する。24. 底径(推定)は5.0cmを測る。胎



写真9 第2号窯址出土土器



写真10 第2号窯址出土土器

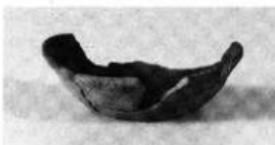


写真11 第3号窯址出土土器



写真12 第2号窯址出土土器



写真13 サブトレンチm-n出土陶器



写真14 第2号窯址出土鉄製品

土はやや緻密で赤色粒・白色粒・石英を含む。焼成は良好で赤褐色を呈し、内外面とも黒変部あり。底部は回転糸切り痕。25. 底径(推定)は4.7cmを測る。胎土は緻密で赤色粒・石英を含む。焼成は良好で明褐色を呈する。

灰釉陶器 (第4図26・写真13)

サブトレンチm-n出土。高台径7.2cmを測る。砂粒を含み、焼成は良好で灰白色を呈する。

鉄製品 (写真14)

第2号窯址において楔状の鉄製品1点出土。全長は14cmを測り、断面はほぼ正方形(最大部分で一辺約8mm)を呈する。

第V章 ま と め

(a) 遺 構

今回の発掘調査は、調査面積が狭少であったため、試掘調査的性格が強く、調査前に掲げた窯址の構築状況の把握等の調査目的を十分に果たせなかつた感がある。第1号窯址を除いては第2号・第3号窯址とともにその構造を確実に把握できず、窯址であるということも一部疑わしい面もある。現段階では、2~3の問題提起と若干の推測をはじめて考察を行つてみたい。

第2号窯址の場合、多量の遺物とともに拳大の焼上塊が出土しており、この焼上塊は若干の面取りを施し、一部にスサが看取される。このことは窯の賦あるいは天井部にスサ入りの粘土を使用した可能性を考えられ、大小久保遺跡や前田遺跡等でみられるような単純な構造の半窯ではないと思われる。平安時代末期における土師窯は、特に西日本に多く発見されており、東日本ではその発見例は少ない。岡山県沖の店遺跡ではかわらけ類を焼いた单室円筒窯が発見されており、いわゆる煙管形を呈している。本窯址も沖の店遺跡の窯と類似する形態の窯である可能性がある。しかし、サブトレンチ内におけるセクションには、地面を掘り込んだ形跡等が認められないため、現段階では推測の域を出ない。

遺物については詳しく述べるが、本窯址の場合焼成された器種がある程度限定されており、壺・瓶・皿等の什器類を中心としている。出土遺物の時期の検討から、第2号窯址は凡そ11世紀後半頃~12世紀前半頃、第3号窯址は11世紀前半頃の時期が与えられると思われる。

本窯址の立地をみると、集落に近い場所を選ばず山の中腹に窯を構え生産活動を展開している。窯の構造あるいは焼成のための燃料の関係のためだろうか。従来、土師窯は集落内や集落の近くに構築されるものと考えられてきたが、本窯址の場合この例に従っていない。今後この現象をどのように捉えるか大きな課題となろう。また荒神山の窯で焼かれた生産品の供給範囲の問題は、発掘調査の段階でも本窯跡周辺地域の粘土のサンプリングを行い、現在もデータの収集を行つており近い将来何らかの成果があらわれるものと思われる。

最後に、この荒神山窯跡のもう1つの性格として考えられることは、古墳時代以来長野県内

の東山道筋を中心に行われてきた「荒ぶる神」の信仰の対象にされた祭祀的な場とも考えられる。荒神山自体、峠道とは直接関係ないし窯跡からもこれといった祭祀遺物はみられないが、本周辺地域の祭祀の場の可能性も十分に考えられる。荒神山北斜面においても焼土等の散布している箇所もあり、荒神山全体が窯あるいは祭祀の場と考えられ、その具体像が明らかにされるのもそう遠くないものと思われる。

(註1) 東京都教育委員会 桥田健司氏に実見していただいた。厚く感謝申し上げる次第である。

(註2) 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1981

(b) 遺 物

今回の調査においては、発掘箇所の制約により造構の性格については十分把握するには至らなかったのであるが、遺物、特に土器類の側から少し検討をくわえてみたい。

前述したように土器の大半は、第2号窯址・第3号窯址の焼土層・炭化物層付近から出土している。器種については土師器・土師質土器ともに壺・皿等の什器が大部分であり、この遺跡の大きな特徴となっている。

第1号窯址においては伴う頗るな遺物が検出されなかつたが、第2号窯址・第3号窯址においてはともに土師器と土師質土器が出上している。しかしその比率については大きな差があり、第2号窯址においては土師質土器、第3号窯址においては土師器が主体となっている。第2号窯址出土の柱状高台をもつ土師質土器は、県内においては勝沼バイパス274地点・319地点・338地点、東新居遺跡、北堀遺跡、笠木地蔵遺跡、権現堂遺跡、義清神社内遺跡などで出土しており、年々資料が増加しつつある。これらの上器群に対して長沢宏昌氏は12世紀代をあてており(長沢1985)、坂本美夫氏は11世紀後半から12世紀前半とし(坂本1986)、第3号窯址出土の土器は11世紀前半頃の所産と考えられ、そうすると第2号窯址と第3号窯址では多少時間差が生じてくることとなる。土師器と土師質土器では、器形・胎土・焼成等に違いがあり、当然、用途・窯の構造・焼成方法・工人集団のあり方などにも理由を求めるべき点があるであろう。これらの土器質土器が第2号窯址で、土師器が第3号窯址で実際に焼かれたものとすると、この荒神山では時期差はあるものの非常に近接した所でこの異なる土器群を焼く窯が営まれていたことになる。

また、第2号窯址のサブトレーンセクション図を見てみると、まだ下部に焼土層・炭化物層があり、土師器片も下層から出土しているため、さらに古い窯址と重なっていることも考えられ、この地域に継続的に、あるいは断続的に窯が営まれていたことも考えられる。

今回の調査及び報告の段階においては、平安時代末の什器を中心とした窯址として考えてきたが、窯の構造等が判明しない現在においてはまだ窯と限定しない方がよいと思われる。また土器の出土状況も明らかにここで焼いたものと断定できるような状況とはいえない。

土器の生産地を明らかにすることは、当時の生産・流通・消費といった社会構造を解明する上で不可欠なことであり、この遺跡が甲斐国の中世社会の充実に寄与する点は大なるものがあると思われる。

参考文献

- 坂本美夫ほか 「甲斐地域」「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題」神奈川考古第14号 神奈川考古同人会 1983
- 長沢宏昌 「笠木地蔵遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第12集 山梨県教育委員会 ほか 1985
- 坂本美夫 「甲斐国における古代末期の土器様相」「シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古第21号 神奈川考古同人会 1986
- 小野真一 「祭祀遺跡」 考古学ライブラリー10 ニュー・サイエンス社 1982
- 中村 浩『窯業遺跡入門』 考古学ライブラリー13 ニュー・サイエンス社 1982

発掘調査組織（順不同・敬称略）

調査主任 萩原 三雄

調査員 煙 大介・平野 修

調査及び整理
参 加 者 堀内 正美・武藤 秀子・岩波二二子・手嶋 沖江
樋口 静子・佐藤 美仁・佐々木 進・佐々木大一
河西 学・櫛原 功一・宮沢 公雄・大村 昭三
宮川 昌蔵・広瀬千江美・中山 千恵・武井美知子
田代 孝

事務局 山梨市教育委員会

荒神山窯跡発掘調査報告書

昭和62年3月25日印刷

昭和62年3月31日発行

編集・発行 山梨市教育委員会
印 刷 有限会社 日興印刷所

